

第六場面 七組のまとめ

「僕」は、後悔し、悲しみにくれながら家に帰った。そして、悩みに悩んだ末、母に一切を打ち明けた。母は自分を責めながらも、「僕」にエミールの所へ行くように言った。しかし、エミールには「僕」の言葉など言い訳としか見えないと思い、なかなかエミールの所に行けなかった。それでも母に背中を押され、エミールの所へ行つた。しかし、「僕」はすぐに謝罪すればいいものを、わざわざちようを見せてもらい、蝶が直つていないことを確認し、自分がしたことを告げた。

磯野菜々加

「僕」は、母に真実を打ち明けた。一番の良き理解者の母に嘘をつき、罪を重ねたくなかったからだ。母は、自分を責めつつも、自分がしつかりしないといけなため、エミールに謝罪することはあえて言わなかった。ただ、「僕」は、すぐには行けなかった。彼が自分の悲しい気持ちを理解してくれないだろうと悟つたから、ずっと時間だけが過ぎた。そして、「僕」は、自分がちようを盗み、壊してしまったという、自分のしたことを正直に告げた。しかし、エミールはやはり「僕」の思いを理解してはくれなかった。

大久保咲良

「僕」は、謝罪をするために、エミールの家に行った。しかし、台無しになったちようを見たり、エミールが繕った跡を見たことで、謝罪する気持ちだんだん恐怖へと変わった。そのためか、「僕」は、謝罪することができず、「僕」がエミールのクジャクヤママユに対してしたことをエミールに告げただけだった。

植木伯臣

「僕」は、母の説得もあり、エミールに謝罪することを試みたが、エミールの家に着き、自分の手で壊してしまったちようを見て、エミールが必死に繕っていたことを他人事のように見ていたが、もう、直すよしもなかったのので、「僕」がクジャクヤママユを壊してしまったことをエミールに告げた。だが、「僕」は、謝らうという気がなかった。

岩田美咲

「僕」は、昼から夜まで、エミールに謝罪する勇気がわいてこなかった。母に自分の罪を告白することを推され、ようやくエミールの家まで行つたと思いきや、「僕」の口からこぼれた言葉は、エミールを怒らせる源となつていた。エミールの部屋へ入り、壊したちようをもうこれ以上復元するのは無理だろうと確認した「僕」は、自分の罪を告げようと決心した。

内木希美

「僕」は、自分がしてしまった罪を謝罪しようと悩みに悩んで苦しみ、やっと謝ることを決心できた。けれど、いざエミールの家に着くと、「僕」の決心は揺らぎ、自分がしたことを謝るチャンス逃してしまった。そして、エミールの部屋に入り、まだ形が崩れたままのちようを見ると、やっと決心がつき、自分がしたことを告げた。しかし、告げられただけで、エミールの怒りは収まるはずもなかった。

下り藤文乃

